

21. 動静脈奇形 2 症例における ^{123}I -IMP スキャンと $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO スキャンの比較検討

今井 啓子 松田 博史 辻 志郎
大場 洋 寺田 一志 久田 欣一
(金沢大・核)
東 壮太郎 池田 清延 (同・脳外)

動静脈奇形 (AVM) を有する患者に ^{123}I -IMP, $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO 両者によるイメージングを施行したところ、前者では AVM に一致して欠損を示したが、後者では欠損は不明瞭であった。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO は、血球成分、血清蛋白への高い親和性を有するため、局所脳血流量のみならず局所脳血液量が加味されたイメージを示すと考えられた。

われわれが経験した AVM 患者での両者の所見の分離も、これにより生じたと考えられた。

22. 脳梗塞症例における ^{123}I -IMP delayed scan の有用性の検討

田所 匡典 月田 邦彦 小幡 康範
(名古屋第一赤病院・放)
伊藤 健吾 牧野 直樹 大島 統男
石垣 武男 佐久間貞行 (名古屋大・放)

N-isopropyl-p-(^{123}I)iodoamphetamine (IMP) 脳血流シンチにおいて、いわゆる“再分布”と viability の関連を調べるため、脳梗塞 7 症例 10 病巣を対象に IMP 脳血流シンチを施行し、30分、5 時間後に撮像した。IMP 施行後 2 か月以降の CT を基準として viability の判定を行い、viability ありと判定した 5 病巣すべてに 5 時間像にて再分布が認められ、viability なしとした 5 病巣では再分布は認められなかった。再分布と viability には強い相関が認められ、viability の指標となると考えられた。

23. I-123-IMP と Tc-99m-HMPAO 2 製剤により認められた Crossed-Cerebellar-Diaschisis (CCD) の 4 症例

伊藤 圭一 坂本 真次 金子 昌生
(浜松医大・放)

1987 年 1 月より 5 月にかけて本院において上記 2 製剤により“CCD”の認められた 4 症例を抽出し、視覚的にその評価を行った。評価は OM+20 mm における Transaxial-Image をもって行い、Scan 法は全例 Fronto-Vertico-Occipital-Scan によった。IMP で両側小脳半球間の差異の認められた症例のなかに、HMPAO でもほぼ同様の差異の観察された症例が存在した。

24. Tc-99m-HMPAO による脳 RN アンギオの意義——ECT, X 線 CT ならびに脳血管造影との比較——

仙田 宏平 伊藤 茂樹 中条 正雄
嶋田 博 安江 森祐 辻 明
(国立名古屋病院・放)

Tc-99m-HMPAO による ECT に先立って、同剤で RN アンギオ (以下, RNA) を行い、その虚血性脳血管障害診断に対する意義を ECT, X 線 CT (以下, XCT), ならびに脳血管造影 (以下, CAG) 所見と比較して検討した。対象は脳梗塞 20 症例を含む虚血性脳血管障害計 34 症例であった。RNA は Tc-99m-HMPAO 約 15 mCi (2.5 ml) を用いて施行した。

Tc-99m-HMPAO による RNA 画像は、内頸動脈血流異常または脳灌流異常につき CAG 所見を比較的良く反映し、虚血性脳血管障害の診断に対する意義を認めた。しかし、脳灌流低下の診断には ECT より劣った。また、時間-放射能曲線による診断的意義は、両側性多発性梗塞について低かった。

25. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO による脳血流シンチ

牧野 直樹 伊藤 健吾 大島 統男
石垣 武男 佐久間貞行 (名古屋大・放)
田所 匡典 (名古屋第一赤病院・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -HMPAO (PAO) の臨床例を経験したので、他検査との比較を含めて報告した。